

附属幼稚園との共同研究・協働型授業『紙芝居の作成と読み聞かせ』が行われました。

本学部の授業「子どもの理解と援助（演習）」（担当者：長崎大学 野中陽一朗 准教授）の一環として、6月に続き、7月3日（木）に附属幼稚園の年中児を対象とした紙芝居の作成と読み聞かせが行われました。この紙芝居は、不審者に会った際の対応をよりわかりやすく伝えるために、年長児の発達特性を踏まえて制作されました。読み聞かせでは、「いかのおすし」の理解、自分の身を守る行動を再認識できるよう工夫がなされました。ペープサートや場面の演出、問いかけを通して、子どもたちが物語に感情移入しながら主体的に考える姿が見られました。

また、読み聞かせの前には、学生たちが年中児のプール活動の様子を観察しました。着替えや移動時の人数確認、保育者の役割分担のような安全確保のための工夫や、虫の動きを取り入れた準備運動のような子供たちが楽しむための工夫など、プール活動のためになされているさまざまな工夫を学びました。読み聞かせ終了後には、園長先生や副園長先生からの講評を頂き、学びを意味づけいただきました。2回の観察記録等は大学の授業内で学びを深めることに繋がりました。

*本実践は、2020年から継続した附属幼稚園との共同研究（幼児期における防災・安全教育のあり方と教材の作成）、2023年度から実施した協働型授業の一部です。

A グループ：「あれ？ このひとしってる？」

幼稚園児が不審者に出会った際の対応を学ぶことを目的に、6名の学生が協力して制作しました。ハナちゃんが初めてのおつかいの帰り道で不審者に声をかけられ、「いかのおすし」を思い出して逃げる物語です。キャラクターの作画を統一し、場面に合った背景や体格差の描写で安心感や緊張感を演出しています。また、不審者は優しそうな人物から徐々に豹変する様子を絵と語りで表現し、子どもが危険を見極める力を育む工夫がされていました。紙芝居の展開には途中まで引いて見せる仕掛けを取り入れ、わくわく感を高めています。そして、「いかのおすし」はペープサートで提示し、紙芝居後に復習することで理解を深め、子どもに合わせて問いかけることができるよう配慮されるものとなっています。



B グループ：「じぶんをまもる あんぜんルール」

幼稚園児が不審者に出会った際の対応を学ぶことを目的に、5名の学生が協力して制作しました。兄妹のこうくん、ちいちゃんが、駄菓子屋で知らない人に声をかけられ、こうくんが「いかのおすし」を思い出して逃げる物語です。ペープサートを使い、頭文字を色付きで提示しながら子どもたちの興味を引き、集中力を高めました。物語の振り返りを通して内容の定着を図るだけでなく、登場人物の声を分担することで理解を助けています。また、視覚的・聴覚的な工夫を加え、子どもたちが自分のこととして考えられるような工夫もなされます。そして、言葉選びにも配慮し、4歳児にも分かりやすく命を守る大切さを伝える内容となっています。



紙芝居の読み聞かせ場面の一部（双方とも幼児の学びや考えを創発させる多様な手段を用いています）

A グループ：「あれ？ このひとしってる？」

紙芝居中の読み聞かせ場面



【実践を通しての学びや課題：一部整理抜粋】

- ・子どもが主体的に考えられる問いかけや環境づくりの重要性を実感しました。
- ・伝えたい内容を効果的に届けるためには、導入・表現・教材の工夫が欠かせないことを学びました。
- ・声色や感情表現の難しさが課題となり、より魅力的な読み聞かせには練習と工夫が必要だと感じた。
- ・ペープサートや絵の使い方、実物資料の活用など、子どもにとって分かりやすく伝える工夫と改善点がある。
- ・子どもたちの反応を受け止めながら柔軟に対応する力が、保育実践には求められることを改めて感じました。

B グループ：「じぶんをまもる あんぜんルール」

紙芝居中の読み聞かせ場面



【実践を通しての学びや課題：一部整理抜粋】

- ・子どもが主体的に考えられる問いかけや、視覚的なイラストを通じた理解の促進が効果的であることを学びました。
- ・物語の構成やペープサートの工夫により、年齢に応じた集中力の維持と安全意識の定着につながることを実感しました。
- ・ペープサートの内容が文字中心だったため、年齢に応じた視覚的な工夫がさらに必要だと感じた。
- ・導入時の雰囲気づくりや読み聞かせのテンポ調整が課題として残り、より丁寧な準備が必要だと感じました。
- ・読み聞かせのテンポが早くなってしまい、子どもが内容を十分に理解できたか不安が残った。